

上海知識青年の下郷初期の生活 — 『陸融家書』(1970年～1972年初)を中心に—

遊 又

はじめに

「上山下郷¹」運動(以下、下郷)および知識青年²(以下、知青)に関する既往研究は、主に1960、70年代の中国における政治的・社会的問題の分析に焦点を当ててきた。例えば、アメリカ人のThomas Bernsteinやフランス人のMichel Bonnin(中国名:潘鳴嘯)、さらに劉小萌、定宜莊、顧洪章の業績が挙げられる(Bernstein 1997; 潘鳴嘯 2013; 劉ほか 1995; 劉 2009; 顧 2009)。ところが、学者たちは下郷の全貌を理解するため、主にマクロ歴史学の視点から分析する傾向があった。例えば、これらの多くの研究は、下郷の参加者を「知青」、「農民」、「工人」などの異なる集団に分類し、それぞれの集団に対して比較を行っている。これらの研究は、「上山下郷」運動史や「知青史」の基礎を築き上げた。近年、学者たちは、「知青の日常生活」や「知青と農民の関係」などに焦点を当て始めている³。張(2021)は、江西省井岡山地域の雲莊村における知青と農民の関係を「工分⁴」に焦点を当てて分析し、両者の経済的利益の衝突や国家政策に対する不満が、知青と農民の長期にわたる緊張関係を生み出したものを明らかにした。また、丘(2021)は、福建省の西の武平、上杭、永定県に下放された厦門の知青を研究対象とし、帰省して春節を迎えることと、農村に留まり「革命化春節」を過ごすことの矛盾、そしてその矛盾が国家政策と伝統的民俗との間に生じる緊張関係を反映していることを主に分析した。

70年代末～90年代後半の「知青研究」は、主にマクロ歴史学的な視点から行われてきた。このアプローチでは、知青たちの集団的な動向や政策がもたらした広範囲な影響に焦点を当て、下郷を政治的・社会的背景や経済的影響の中で捉えようとするものである。多くの研究は、知青を当時の政治体制や社会構造との関係を通じて解釈し、社会全体に与えた影響や集団的な行動様式に注目し、知青という集団の歴史を包括的に把握しようとしてきた。このようなマクロな分析は、下郷の規模や政策の意図を把握する上で重要な貢献を果たしてきたものの、個々の知青が持つ多様な経験や感情は抽象化されがちであり、個別的な歴史が十分に

反映されているとは言い難い。

これに対し、2000年以降の「知青研究」は、より個別的な生活経験や、知青たちが直面した具体的な問題に焦点を当て、彼らの経験を小規模な社会関係や個人的な感情から読み解くものである。マクロ歴史学と比べて、ミクロ歴史学は知青個人の内面的な変化や成長、または農村生活への適応過程をより詳細に明らかにし、集団的な視点では見過ごされがちな日常生活の実態や知青の多様な姿を捉える可能性を示している。個々の知青の視点を通じて、政策や制度が具体的な生活や意識に及ぼす影響を与えたかを理解することにより、下郷に隠れた異なる歴史像を描き出すことが可能である。

しかしながら、現在の知青研究におけるミクロ歴史学の試みには、方法論としての限界が存在している。表面上、いくつかの研究が小規模な集団や個人に注目しているように見えるものの、最終的にはそれを普遍化の事象にし、下郷運動全体の一部として位置づける傾向が見られる。これらの研究は、個別的な知青の経験を詳述しつつも、辿り着いた結論を再びマクロな歴史的枠組みに回収し、知青の経験は最終的に集団的なものであると強調している。その結果、各個人の体験が持つ独自の意味や価値は既存の歴史観に埋没するようになるかもしれない。すなわち、ミクロ歴史学が知青研究に対する可能性が十分に発揮されているとは言えないのである。

下郷期間、多くの知青は少年から青年へと成長した（17、18歳～20代後半）。青少年期のこの数年間は、人の成長において個々の人生の軌跡に大きな影響を与える重要な段階である。しかも、知青が成長した下郷という環境は、中国の長い歴史を踏まえても、恐らく想定しにくい出来事であろう。したがって、研究の焦点を真に知青個人にまで細分化し、各知青の「下郷」経験が1人ひとり独自の個人史、感情史、心性史であることを明らかにするのは必要がある。以上の視点を明確する上、本論文は、先行研究を踏まえ、「知青研究」におけるマクロ歴史学の枠組みを超え、「人」の視点から記述を試みる。また、知青の実際の感情を描き出すことを通じて、知青研究を深化させることを目指す。

本論文が利用した資料は、主に上海知青である陸融が1970年5月から1972年初めにかけて両親宛に送った手紙である。陸融は1953年に生まれてから中学卒業の16歳まで、家族とともに上海市静安区に住んでいた。家族構成は祖母、父、母、兄、弟、そして彼自身の6人で、一般的な労働者階級である。家族の中には「黒五類⁵」分子はおらず、陸融は特権（例えば、より良い学校を選ぶ権利や上海から近い下郷先を選ぶ権利など）も享受できなかった。彼の言葉によれば、「私は幼少期に武闘や抗議などの極端的な行動に一切関与せず、他人との衝突もほとんどをしなかった。一目で、自分は上海人であることがわかる（我一看就是上海

人)⁶⁾」とのことである。

陸融は下郷期間中(1970年5月～1979年1月)に家族へ合計223通の手紙を送った。現在、この223通の書簡は良好な状態で彼の上海の家に保存されており、2009年に整理・編集されて書簡集『一名上海知青的223封家書』として出版された(見参考文献)。筆者はオリジナルのテキストと「書簡集」を比較対照した結果、内容に関して大きな修正がなく、誤字や脱字もそのまま残されていることを確認した。したがって、便宜上、本論文において、陸融の書簡に関するすべての引用は『一名上海知青的223封家書』を基準とし、以下「家書」と表記する。

「家書」は約50.5万字にわたり、日常生活や個人の考えなど、マクロな歴史叙述では明確に捉えられない出来事や、一見「楽しみ」と思われ、実際に「悲しみ」が秘められているような表現が多く含まれている。これに加え、筆者は陸融との個人的な連絡を保ち、幾度も彼の上海の家を訪問した。特に2023年8月19日と2024年8月27日の二度にわたるインタビューでは、陸融およびその妻、知青の沈志明、復旦大学教授の金光耀、上海知識青年歴史文化研究会元会長の張剛らの証言を得た。インタビューにおいて、陸融は多くの「報喜不報憂(喜びのみを伝え、憂いを伝えない)」の実例が明らかとなり、書簡の文面だけでは掴みきれない彼の当時の「本当」の考えを補足することができた。本論文では、テキストとオーラルヒストリーを組み合わせることで、陸融の人生を複合的に考察し、下郷期間における知青の日常生活、労働、家族や人間関係の問題を多面的に再考する。

I. 新たな生活環境

1. 住居

1969年、雲南省の辺境エリアでは、下郷の開始に伴う人口増加に対し、住居の供給が需要に満たせなくなった問題が現れた。このような背景に基づき、1970年に農場に到着した陸融はただ「草屋」に住むことしかできなかった。当時、小隊のリーダーは年末までに新しいレンガ造りの家を建設すると約束した。しかし実際、新しい竣工の住居は電気や水道、トイレなどの基礎設備が欠けており、住居の品質にも問題があった。潘鳴嘯(2013)は、一部の知青が新しい住居の建設に(強制的に)参加させられ、これが彼らにとって「上山下郷」の最初の「授業」となっていた、と指摘している。そして劉(2009)によると、生産建設兵団に加わった知青は政策により400元の安置費が支給されるべきであるが、その費用が実際上どのように使われていたかは不明であるため、結局多くの知青は自分たちの住居を自分の手で建てるように指示されることになった。陸融の妻、劉萍は農

場に到着する時、「私たちがトラックから降りたとき、見渡す限り広がる田畑しか見えず、指導員が隣の数棟の『草屋』を指差して、『これが君たちの住居だ』と言い渡しました。そのとき、数頭の豚が田畑から飛び出してきて、隣の女の子が突然泣いて、上海に帰りたいと騒ぎ始めました。」⁷と回想している。

陸融の書簡および地方誌の記録に基づき、筆者は2024年8月に兵团旧址に辿り着いた。当時の「草屋」はすでに取り壊された。現在の兵团旧址を見渡すと、視界に広がるのは雑草地だけである。交通手段を使わず、徒歩で最寄りの町に移動するのはおよそ2、3時間がかかるだろう。当時、道路すら舗装されなかったことを考えれば、その困難さを想像しうるであろう。そのような光景を目の当たりにすると、劉萍の回想に示した当時の女子学生たちの心境も理解できるであろう。陸融の口述によれば、雲南に行く前、彼と劉萍は共に上海市静安区に住んでおり、両家は近かった。陸融の家族は裕福とは言えないものの、彼の生活水準は当時の社会平均水準を上回っており、陸融が幼少期から住んでいたのは全てビルであり、水道水という現代文明の産物も日常に使用していた。しかし、雲南の農場の様々な光景は、彼にとってまったく異様なものであった。農場での住居環境について、彼は農場に到達した後、両親宛の第二通目の手紙で次のように述べている。

私たちは現在、「草屋」に住んでいます。先輩の話によれば、今年の雨季（10月）が過ぎたら瓦造りの家を建てるという予定です。しかし、「草屋」には一つの利点があります。それは、夏の時は瓦造りの家より涼しいということです。私たちは竹製のベッドで寝ており、部屋は約15平方メートルです。食事や飲み水が使われているのは井戸水です。ここには電線があるが、電球が不足しているため、夜は灯を点けることができず、火油灯を使うしかありません。（家書1970年6月3日より）

この手紙の中で、陸融は、自分が住んでいた「草屋」に対する苦情を述べるのではなく、むしろ自分の部屋が約15平方メートルの広さであったことを強調している。彼は4人の同級生と共同で住んでいたが、上海の自宅と比べて、住居はかなり広々としていた（陸融は、下郷まで家族全員6人が古いビルに住んでおり、部屋の広さは約20平方メートルしかなく、1人あたりの生活空間は非常に狭かったと述べている⁸。これも上海の住宅状況を反映している）。さらに、この手紙の後半では、当地の豊富な果物と快適な気候について、陸融が詳しく述べており、彼が初めて農場に到着する際に感じた新鮮感が、不安や心配よりも強かったことが窺える。

雲南兵団の住居条件は、明らかに上海などの都市より劣っていた。前述の「安置費」に関して、地域や小隊によって状況が異なるため、新築住宅に投入した資金の額を正確に把握するのは困難である。劉ほか（1995）によれば、ほとんどの生産建設兵団は中央政府からの財政支援を計画的に使用しておらず、知青のための新しい住居建設に充てられた資金は予想よりも少ない場合が多かった。具体的な状況は、劉小萌が示した1969年の内モンゴル兵団における知青安置費の使用統計から一部を垣間見ることができる。

1969年、内モンゴル生産建設兵団は知青5万人以上を受け入れる予定であった。安置費としては2,000万元以上が支給される予定であったが、実際の支給額は1,152万元に留まった。兵団は知青の住宅専用項目を兵団行政用住宅計画に統合し、特定項目のために用途限定の資金を設けなかった。また、各師団も投資計画の状況を別途報告するようなこともしなかった。1,152万元の投資のうち、兵団の推定によれば、多くでもその半分しか達成されなかった（劉ほか1995：p367）。

当時、雲南における知青のために用意された「草屋」の構造は、地元の傣族の伝統的な住居と同じ、地元住民の住居と大差はなかった。しかしその後、新築の屋根は工期が早められたため、さらに簡素な造りとなった。陸融は1970年末に新築のレンガ造りの家に移ったが、この「レンガ造り」は「草屋」の基礎に泥と瓦を使って壁と屋根を補強したものである。風雨を防ぐことができたとはいえ、設備上は大きく改善されてきたとは到底言えなかった。劉小萌らは、兵団内には厳しい階級意識が存在し、師団や大隊の指揮部は高大な屋敷を持つ一方、小隊には簡素なレンガや土造りの家しかなかったと指摘している（劉ほか1995：p93）。沈志明も「1974年に大隊の指揮部が入った後、住居条件が改善された」⁹と述べている。陸融と劉萍は、「私たちの小隊は国营農場の古い農場であるが、条件は新設の分場よりも良いものであった」¹⁰と語っている。総じて、陸融が下郷後期に指揮部に移った後の住居条件と比較すれば、「草屋」の住居条件は決して優れたものとは言えない。

さらに、住居の安全面でも兵団の管理には多くの問題があった。「草屋」の建築材料は極めて乾燥しており、燃えやすい茅であるため、火災を引き起こす可能性も高かった。例えば、1971年3月23日には、3師13小隊（盈江農場）の知青宿舎で火災が発生し、成都出身の10名の女性知青が焼死したという悲劇が起きた（劉ほか1995：p655）。事故の原因は灯油がこぼれ、「草屋」に引火したことである。この事故は、劣悪な住居条件と共に、知青が経験した苦難として語られ

るものとなった。しかし、この悲劇を引き起こしたのは人為的な要因が多く、当時の農場では知青の日常生活における安全問題に対する関心が極めて低かったことをも反映している。農場の指導者を含め、安全面が問題視され、改善や防止が促されたのは、災害が発生した後のことであった。

2. 水の問題

陸融が両親に農場の用水の状況を説明する際に、「飲水も生活用水もすべて井戸水です。私はすっかり慣れました。入浴も井戸水で、毎日仕事から帰ってくると必ずシャワーして、非常に気持ちがいいです」(家書 1970 年 6 月 23 日より)、と書いている。それは、陸融が農場に到着してから最初の月の家族宛の第三通目の手紙であり、残りの二通の手紙にも水の使用に関する記述が含まれている。「草屋」にはトイレや浴室が備えられておらず、夏は何とか対処できるものの、冬の夜間の入浴や水の使用は困難であった。

いくつかのデータによれば、1970 年頃の中国の都市における水道普及率はそれほど高くはない。例えば、雲南省の省会である昆明市では、1982 年までわずか四つの水道施設しか敷設されていなかった¹¹。そのため、兵団が所在する辺境地域において、水道施設の普及はさらに遅れることとなった。筆者が今年 8 月に行ったフィールドワークの際、現地住民から聞いた話によれば、陸融が所属していた小隊の旧地基には、80 年代に農場が廃止されるまで、水道管が敷設されていなかったそうである。従って、これらの地域では井戸水や川の水を使用することが一般的であった。都市で育ち、水道水を使用することに慣れてきた知青にとって、井戸水の使用は身体的な不快感を引き起こすだけでなく、心理的にも大きな落胆を感じる要因となった。陸融は手紙の中で「自分は慣れてきた」と何度も繰り返して述べているが、その裏には農場の環境に完全に適応していないニュアンスが窺える。その後の手紙でも、この点が証明されている。「到着して数日間、この井戸水を見て汚いと思いましたが、使わないわけにはいかず、やむを得ずにこの水で口をすすぎ、顔を洗い、煮沸して飲んでいました。」(家書 1970 年 7 月 15 日より)

では、陸融はどのようにしてこの問題を解決したのか。彼によれば、「しかし、飲んでも何の問題もありませんでした。先輩たちは何十年もこの水を使い続けてきたのだから、私たち若い者も鍛えることができないはずはありません。」(家書 1970 年 7 月 15 日より) これらの記述から、陸融は農場に到着した初期、身体がすぐに新しい環境に適応できたわけではなかったが、精神的には自分を可能な限り適応させるように努力していることが分かった。そのような自制的な行動は「革命の使命感」に起因する可能性があり、また、家族に対する「責任感」に由来す

るものであると考えられる。前者は知青の手紙や日記で頻繁に見られるものであるが、後者は家族宛の手紙では直接的に表現できるものではなかった。

インタビューの中で、筆者は陸融にこの問題について尋ねた。彼の返答を要約すると、「農場の条件は上海とは比べ物にならないが、克服できないものではありません。苦しいのは確かであるが、最も基本的な生活に支障はなく、慣れれば大丈夫です。手紙の中の革命のスローガンは自分を励ますためでもあり、家族を安心させるためでもあります」¹²。

陸融の答えは、「知青が身体的および心理的に苦難を経験した」、「知青が農村環境に適応できなかった」、と劉ほか(1995)や潘鳴嘯(2013)の結論を否定するものではない。むしろ、陸融のような知青が「苦難に耐えられないわけではない」、「農村環境に適応できないわけではない」ことを認識すべきである。水の使用に関して陸融が示した態度の変化は、知青個人の下郷期間中の感情の波や生活の細部を補完するものであり、陸融のような「中間層普通の知青¹³」が苦難に直面し、それを克服した過程を理解するための優れた事例である。陸融の手紙には「水の問題」と同様の事例が多く記録されている。例えば労働や食事に関しても、彼が適応するには多くの時間が費やされ、その過程でほとんど不満や抵抗を見せなかった。陸融は自分が知青のエリートでなく、エリートになりたいわけでもないとして明確に述べており、「革命への信念」によって心の慰めを得ることを避けていた。

II. 労働と安全

1. 労働

1970年に下郷が始まり、雲南国営農場は雲南生産建設兵団に改編された。林彪の「ゴムを大いに発展させ、全国人民の需要を満たそう」というスローガンの下、雲南農墾は第2回のゴム植栽ブームを迎えた。それをきっかけ、1972年には農墾職員（知青を含む）が18.8万人に達した¹⁴。そうした中、陸融は農場に到着した。

生活がひと段落すると、知青たちはすぐに農業生産に取り組み始めた。ゴム植栽の任務に加え、各師団は、さらに農作物の生産任務が課されていた¹⁵。陸融の所属する小隊も、水稻などの穀物の栽培を担当していた。ゴムの植栽は技術と経験が必要であり、農業に不慣れな知青にとって難しい作業であった。そのため、新規知青たちは、まず古参知青や農場のベテラン職員から農業技術を学び、草取りや耕作から始め、最終的にゴムの生産に取り組めるようになった。最初の1か月間、兵団の軍事化管理のもと、陸融は非常に規則正しい生活を送っていた。

前日は到着してからちょうど1か月で、すべてに慣れてきました。毎朝6時に起床し、6時半に朝食、7時から「天天読¹⁶」、8時から12時まで労働、12時から午後3時まで休憩、午後3時から6時まで再び労働し、その間に30分の休憩があります。毎週火曜日の午後は学習日です。現在の労働は、トウモロコシ、大豆、ピーナッツ畑の草取りと土寄せです。(家書1970年7月3日より)

最初の2か月間、陸融は、日曜日以外はほとんど休まずに働き、労働に対する不満を抱かなかった。彼には「積極的な姿を両親に見せたい」という動機もあったが、それは必ずしもすべての知青が持っていた態度ではなかった。同じ環境下、多くの知青は、周囲の人々(農民、指導者、仲間など)の行動や反応に影響を受け、心境が変化することがあった。張(2021)は、「農業学大寨」の精神を持つ知青が労働を通じて農民を教育しようとしたが、期待通りの結果が得られず、関係が悪化した過程を分析している。それに対し、陸融の記録では異なる状況が示されている。彼の下郷初期の手紙には、「農村で一生革命を貫くべきだ」(家書1970年7月17日より)や「毛主席の言葉に従い、毛主席の優れた兵士となるべきだ」(家書1970年8月18日より)、という革命的なスローガンが頻繁に見られる。しかし、実際のところ、陸融は農民を教育したり、他人に干渉したりすることはなく、周囲の怠惰な行動にも不満を抱かなかった。陸融は与えられた任務をきちんと遂行し、仕事が終わって手が余ると、他人を助けたり、与えられた任務以上のことを目指したりした。そうして、陸融は小隊の指導者から信頼を得つつ、周囲との良好な関係を保ち、新しい環境に迅速に適応していった。

農場に到着してから3ヶ月後、陸融は「砍壩¹⁷」という「上級」の生産任務を任された。表面上、生産任務には優劣の区別がなく、収入にも格差がない。しかし、知青の日記や手紙により、異なる生産任務に対する彼らの心境の差異が感じられる。陸融はこの時期の手紙の中で、少し興奮した様子を見せている。

今日、砍壩の任務が無事に完了しました。労働期間中、皆が「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れない」革命精神を発揮し、「勇敢に戦い、犠牲を恐れず、疲労を恐れず、連続戦闘を貫く」姿勢を示しました。多くの仲間が軽い病気を克服し、私も足の傷をこらえて参加し、今日の昼、ついに250畝(1畝=6.67アール)の砍壩を完了しました。(家書1970年8月30日より)

実際、知青に割り当てられた農作業以外の任務は、概ね危険を伴うものであった。その中で、例えば、開墾、原生林での薪割りや伐採、ダム建設などが挙げら

れる。雲南兵団は事故が多発する地域であり、毎年、知青が公務中に死傷する事件が多発していた¹⁸。特に「砍壩」はゴム生産において最も危険な作業の一つであった。

2. 安全

1969年末に雲南生産建設兵団が設立された後、知青の人数が急増し、既存の医療水準と条件ではその需要を満たすことができなかった。さらに、食糧供給の不安定さや過度な労働により、多くの知青は、到着後すぐに風土病を患った¹⁹。陸融もその一例である。彼が裸足で田んぼで長時間働いたために皮膚病を患い、その病は一生彼を悩ませた。

1970年以降、雲南生産建設兵団には基本的な医療機関が整備され、医療スタッフも配置されるようになってきた²⁰。一般的に、小隊には衛生室があり、大隊には衛生所、連隊には病院が設置されていた。衛生室には通常一人の衛生員が配置されていたが、彼らは専門的な医師ではなく、連隊の病院で僅か三ヶ月間訓練しか受けなかった知青であった。彼らの主な役割は、負傷者や病人に薬品を提供し、簡単な処置を行うことであったが、手に負えない傷病者は大隊や連隊に送られた²¹。大隊の衛生所には数名の医師と少数の病床があり、比較的複雑な病状にも対応できた。しかし、連隊の病院でも難病や重症患者の救命には限界があり、しばしば地元の駐屯軍や地区病院に頼らざるを得なかった²²。しかし、交通の不便さによる救急搬送の遅延により、知青が死亡するケースもよく発生していた²³。

一方、第2回のゴム植栽ブームの中で、兵団知青はしばしば荒れた山を開拓する「砍壩」の任務を課された。経験者である工人は、知青と同行することが求められていたが、未経験の新知青全員に十分な指導を行うのは困難であった。新知青の中には、自分をアピールするために開拓の最前線に飛び込むものもあり、その結果は、多くの悲劇を引き起こした²⁴。例えば、陸融は手紙で、同級生の黄年秀が「砍壩」で負傷から死亡までに至る経過を詳しく記録している。

私たちの小隊の黄年秀は、今回の「砍壩」で不幸にも木に打たれ、左脚の上部で二箇所、下部で一箇所の骨折をし、肺部に大量の出血がありました。重傷で、救助が間に合わず、職務中に死亡しました。19日の朝、私たちは山へ行き、目的地に到着したのは10時半ごろでした。11時10分に作業を始め、わずか30分後にこの事故が起きました。木を伐採していた作業員によれば、その木は斜めに倒れるはずでしたが、予想外にもまだ完全に伐り倒されていない段階で突然裂けて跳ね上がり、黄年秀に直撃しました。彼女はその場で意識を失い、すぐに連隊の病院に運ばれました。しかし、翌日の午後

大量の血を吐き始め、肺も傷ついていることが判明したが、救助が間に合わず、担当医師も十分な救命対応ができなかったため、結果として、21日午前4時50分に黄年秀同志はなくなりました。砍樹の際、工人は彼女に離れるよう警告したが、彼女の自尊心が強すぎたのでしょう。(家書1972年2月29日より)

これは陸融の書簡の中でも極めて特殊な一例である。彼の全部の手紙を通読すれば、これほどまでに詳細に出来事を描写していたのはこの一回限りであることが分かる。というのも、雲南における知青の事故死・負傷は決して珍しいことではなく、ほぼ毎月発生しており、陸融も時折簡単に触れているが、通常は短い一文で済ませ、口調も穏やかであった。例えば、「今日、瀾滄江で泳いでいた人が溺れて死んだ。小隊全体で通報教育が行われた」(家書1970年6月23日より)や、「向新中学の70期の学生DXXが人を殺したと聞いた。相手は隣の街のDBで、たぶん死刑が下されるだろう」(家書1970年8月4日より)が挙げられる。こうした例は他にも見られる。つまり、自分の中学の後輩が隣町の住人を殺したとしても、陸融は特に驚いた様子を見せていなかった。それにもかかわらず、黄年秀の死に対して、これほどの反応を示した理由について、陸融は筆者に直接説明してくれた。「彼女のことは、上海にいる頃から知っていて、雲南に行く数日前、彼女と父親が私の家に遊びに来た。彼女はとても活発で明るく、笑顔が印象的だった。彼女は妻の劉萍と同じ小隊に所属しており、二人は普段から仲が良かった。両親同士も知り合いだったので、彼女の遺体を目にした時、私は非常に動揺したのだ」²⁵。今日でも、陸融が52年前のこの出来事を思い返すとき、その表情は依然として悲しげである。

黄年秀が亡くなった時、陸融はまだ二十歳未満であった。彼にとって、これは初めて身近な人の死に直面した出来事であった。このような衝撃に対し、青少年であった陸融に共感することは、多くの人にとって容易ではない。このような背景を考慮して陸融の手紙を振り返ってみると、彼の冷静さが際立っていることが分かる。事件の発生を詳細に記録しているものの、悲しみを表す言葉はほとんどなく、ただ「これらの医者には能力がない」という言葉がやや唐突に感じられる。書簡とインタビューを通じて、陸融は普段、他者を貶すことはほとんどなく、不当な扱いを受けた場合でも忍耐や沈黙を選んでいたので、この事件は当時の陸融にとって衝撃的な出来事であったと考えられる。この言葉は彼自身の悲しみと怒りを表現するだけでなく、知青の視点から当時の兵団の医療水準の低さも私たちに示している。手紙の最後で、陸融は、当初はこの出来事を両親に知らせたくなかったことを率直に述べている。両親が黄年秀の不幸を自分に結びつけ

て考えることを恐れたためだが、最終的に彼はその内容を書き記すに至った。これは、陸融が普段の「心配をかけさせない」習慣に反する行動であった。黄年秀の死は、陸融にとって自分が置かれている環境や直面する危険を再認識させる出来事であり、そこから得た精神的な成長は、単純な安全学習やデータなどを超えるものとなった。

更に、黄年秀の父親は娘の死を知った後、すぐ上海から雲南農場に向かい、娘の死後処理を行った。そして、彼は陸融とも面会した。1972年3月12日の手紙で、陸融は次のように記している。

彼女の父親は非常に高い政治的覚悟を持ち、皆に深い印象を与えました。彼は私たち知識青年に話しかけ「辺境で一生懸命に革命に取り組み、社会主義新農民になるように」と教えました。私たちはとても感動し、一緒に写真も撮りました。（上海で休暇を終えて）農場に戻った同級生から聞いた話では、黄年秀の母親はまだ知らされておらず、ただ重傷だだけ伝えられているそうです。今回、彼女の父親が帰った際にその事実を伝えることになるでしょう。きっと言葉にできないほどの苦しみを味わうに違いありません。確かに、特に親としては一層辛いことでしょう。（家書 1972年3月12日より）

ここで、陸融の手紙には、読者に困惑を感じさせる内容が含まれている。なぜならば、手紙の描写からは、黄年秀の父親（以下、黄父）の悲しみがほとんど感じられず、「政治的覚悟が高い」という一言にまとめられていたからである。インタビューにおいて、陸融が当時の写真を見せてくれたが、黄父は非常に若々しく、周囲の知青と変わらない姿で写っており、表情には悲しみや辛さは一切見られず、むしろ笑顔を浮かべていた。筆者はその時、陸融に「黄父は娘の死を悲しんでいないのですか？」と尋ねた。すると、陸融はため息をつきながらこう答えた。「もちろんそんなことはない。黄年秀には当時、新疆兵団で下郷していた兄がいた。娘の死を知った上海革命委員会のある指導者は、（下郷運動への）社会的反発を恐れ、黄父に対し『息子を上海に戻す』よう密かに提案した。その代わり、娘の後事を静かに処理する必要があるのだ。」²⁶ そのため、黄父は農場で「政治的覚悟が高い」姿を見せ、悲しみを心の内に隠していたのである。陸融は手紙を書いていた当時、この事情をまだ知らなかった。その頃の彼は、本当に革命の信念を命よりも重んじる人がいるのだと思っていた。のちに、恋人である劉萍から真相を聞いたのだった。また、黄父は葬儀を終えて上海に戻った後、劉萍の父に「劉萍を何とかして兵団から救い出さなければならない、あそこは人が生きられる場所ではない」²⁷ と言っていた。

筆者が研究を進める中で、黄年秀の死、陸融と黄父の農場での対面、そしてのちに明かされた内情を知ることができた。この経験は、単なる知青研究に留まらない、生々しい個人史の一端であり、当時の陸融の心境を追体験するかのようなものであった。もしこの事件の全貌を知らなければ、多くの人々はこの出来事を単に「知青が直面した苦難の一例」として解釈し、陸融や黄父を先行研究が描き出す典型的な「知青（またはその親）」の一例として理解するに留まるだろう。その結果、「革命への熱意を持ちながらも、中国の政治環境の変化によって次第に考えが変わっていく」（潘鳴嘯 2013:p92-98）という一般的な解釈に陸融の個人史が埋もれてしまう可能性が高い。

しかし、黄年秀の死は、単なる不運ではなく、陸融が置かれていた環境の厳しさや、その中で抱いた葛藤や感情の変化を象徴する出来事であった。この経験を通じて、陸融の内面には強烈な感情の波が生じ、日常生活や人間関係に対する見方が変わるきっかけとなった。特に、陸融のうちに「人間の命や感情が政治や社会の規律に優先されるべきではない」という深い疑問が芽生え、家族や個人の価値に対する新たな認識が生まれたのである。黄年秀の死は、事故や苦難だけではなく、陸融に命の儚さや人間関係の重要さを痛感させ、生涯忘れられない出来事となった。

Ⅲ. 収入と物資供給

1. 「自給自足」

下郷の初期、知青たちは「自給自足」が求められていたが、その具体的な意味は不明瞭であった。多くの知青にとって「自給自足」とは「仕事で自分を養うこと」を指しており、一部はそれを「革命の使命」として捉えていた。しかし実際に、多くの知青は農業の知識や技能を持たず、農業という仕事で「自分を養う」ことが困難であった。張（2021）は、物質的資源の分配が知青と農民の対立の主因の一つであると指摘している。人民公社制度の下で、農業技能に乏しい知青は十分な収入を得られず、生活費を親から援助してもらったり、借金をしたりすることも多かった。

しかし、すべての知青が「自給自足」に失敗したわけではなく、陸融が「自分を養う」ことを実現したのは成功の一例であった。彼は労働に非常に積極的であり、任務も「超過達成」した。初月の給与は 29.02 元に達し、農工 1 級の標準給与である 28 元を上回っていた。さらに、これは当時の農民の平均収入²⁸より大きく超えていた。陸融は月々の生活費を詳細に記録しており、食費については「1

人当たり毎月7円で、40斤(1斤=500グラム)の米が含まれており、1斤あたり0.15元、残りの1元は野菜代に使われる」(家書1970年6月3日より)と述べている。筆者がインタビューで「多くの知青は給与が足りないと不満を言い出す理由は何か」と尋ねたところ、陸融は「多くの知青は喫煙や飲酒、ギャンブルなどの余分な趣味があり、また、景洪市に出かけるのが好きだからだ」²⁹と答えた。彼の手紙に記されている内容を考えると、これらの趣味がなければ、兵团知青の基本給は日常的な支出を賄うのに十分であった。陸融はほぼ毎月、上海の家族に送金しており、家族からの援助に頼る知青とは対照的な姿勢を示していた。また、その積極的な働きぶりにより、下郷開始から半年後には小隊の「文書」に昇進し、1974年に青年幹部としてさらに昇進。結果、収入も増加し、日常的な支出に困ることはなかった。

では、陸融は「自給自足」を達成した知青といえるだろうか。それに関して、まずは下郷のイデオロギー的な動機を再評価する必要がある。下郷のコアな目標である「三大差別の解消」³⁰は、都市住民を農民に、知識人を労働者に変えることで達成されるとされていたが、陸融の「自分を養う」ことはこれに該当しない。そして彼の手紙には「上海人」としての強いアイデンティティが見られ、辺境を都市と比較する内容が多かった。また、一部の知青は幹部に昇進して肉体労働を減らそうとし、陸融も「文書係」として労働参加を減らしていた。とはいえ、幹部になると、行動や思想に偏りが生じ、国家政策に違反する行為を行う知青もいた。

一方、雲南生産建設兵团を含む多くの農場は経済的に不安定であり³¹、1970年から1972年のゴム植栽高潮の成果は乏しかった。陸融の収入は国家の補助に頼るものであり、下郷の経済問題を解決したとは到底言えない。つまり、知青たちは自分の労働がどのように「祖国の建設」に貢献しているかを実感することが難しいということである。上級者から任務の指示だけで、彼らは農場の損益すら知らされなかった。

陸融が上海にいる家族に送金し続けたのは、実際には形式的な意味合いが強く、「自分が雲南でうまくやっている」ということを家族に示すための手段であった。陳(2015)は、「家」が「国家」と「個人」の間で重要な絆となり、政治的な影響を和らげる役割を果たしたと指摘している。陸融は国家が目指した「自給自足」を実現していないかもしれないが、「自分を養うことができる」というメッセージは、送金とともに確実に両親に伝わっていた。

2. 食糧と仕送り

1964年に、国家は下郷青年の食糧供給に関して、いくつかの規定を打ち出した。

その中で、農村の人民公社や国営農林牧漁場に参加する「插隊」知青に対して、以下の二点が重要視されていた。第1に、彼らが農村に到着した最初の月に必要な通用「糧票」を都市の食糧部門から支給することであり、第2に、2ヶ月目以降は地元の食糧部門が生産隊の一般社員の実際の食糧消費水準に基づき、統制的に食糧の供給を行うことである(劉ほか 1995 : p81)。

地域によって経済状況や生産環境が異なるため、この政策の実施効果はさまざまであった。貧しい地域では、食糧不足が起こりやすく、食糧生産が盛んな地域では比較的状況が良好であった。生産建設兵団では基本的な口糧の供給が確保されていたが、重労働であったため人体のエネルギーの消耗も激しく、基本の食糧が確保されたとは言え、知青たちは空腹を抱える場合が多かった(劉ほか 1995 : p94)。

多くの研究者、例えば潘鳴嘯や劉小萌は、下郷の口糧の供給が不足している問題が知青の健康にも深刻な影響を与えたと指摘しているが、口糧の供給不足という背景に基づいた日常の食事に関する具体的な研究は少ない。陸融の手紙は、これに関する貴重な視点を提供している。彼によれば、彼の所属する雲南生産建設兵団は温暖湿潤気候に恵まれ、果物や野菜の供給が他の地域よりも充実していた。陸融は、農場での日常的な食事状況が詳しく記録されている。彼は、「毎月1円でナスや青菜、キャベツ、大根などの野菜を食べている。小隊では毎月1頭の豚を屠殺する」と述べ、さらに「バナナ、マンゴー、パパイヤなどの果物が豊富で、上海のバナナよりも美味しい」(家書 1970年6月3日より)と記している。これらの記録は、雲南辺境地域の物産の豊かさと陸融が新しい環境に適応しつつある様子を伝えている。

さらに、陸融は「少しばかり傣族語を学び、果物を買う時に使っている」とし、糯米や肉、醤油などの配給についても記録している(家書 1970年6月23日より)。また、食糧が余った場合、返金や米に交換する選択肢があったことも記されている。「今月の食糧が4斤余り(糯米6斤を調達してまだ残っている)。余った「飯票」の交換には二つの方法がある。一つは返金で、1斤の米につき0.15元が支払われ、飯票は返されない。もう一つは米に戻してもらう方法で、飯票は返されないが、皆は通常返金を選ぶ。」(家書 1970年7月3日より) また、豚肉の分配についても陸融は述べている。

先月28日(日曜日)、私たちの小隊は一頭の豚を屠り、皆がその様子を目撃した。これは私が初めて見る豚の屠りであった。夜には一人一碗(約100～150グラム)の豚肉が配られ、私はそれを食べたが、脂身を絞って料理に使った。(家書 1970年7月3日より)

これにより、各知青は毎月約1斤の豚肉を分配されており、これは不定期に供給される鶏肉や魚肉と合わせて、当時の中国人の平均的な肉類消費水準³²におおむね合致していた。しかし、この比較的豊かな供給は長く続かず、陸融の食糧供給には不足が生じ始めていた。その背後にはいくつかの要因があった。

まず、陸融が農場に到着した時、西双版納地区はまだ雨季に入っておらず、気候が穏やかで、野菜の生育も順調であった。しかし、雨季が始まると、長期の雨水の影響で野菜の成長は困難になった。また、下郷の初期、多くの地域で新たな知青を迎えるために村の幹部が豪華な食事を用意したため、食糧の供給が不足する状況もあった。兵団知青が国家の財政支援を受けていたにもかかわらず、農場でしばしば食糧や野菜が不足し、食事の支出を削減する場合もあった。雲南兵団農場の「ガラススープ³³」は、そのような環境で生まれたものである。陸融は手紙で、雨季による食糧供給の困難について次のように述べている。

今は朝の軍事訓練がなくなった。主に雨季の影響である。最近では果物を手に入れるのが難しく、人が増えたため、地元の人たちも売ってくれない状況になった。(中略) 最近の野菜はナスと刀豆があるが、他の小隊では野菜がなくなり、ガラススープを飲んでいる状態である。(家書1970年8月28日より)

下郷の期間中、多くの地域の知青、特に「插隊知青」には度々食糧不足に陥ることがあり、多くの知青たちは家族や友人からの仕送りを受けて、ようやく生活を維持するようになった。兵団知青として、陸融は基本的な食事が保証され、完全に食糧が断たれるような状況にはならなかった。そのため、農場の外部、いわゆる家族から送られてきた物資は、彼にとって不可欠な存在であった。陸融の記録によると、彼の所属する小隊の食事の状況は実際には悪くなく、当時の中国の多くの都市部の食糧供給よりも優れていたことが分かる。しかし、陸融が家族から送られてきた物資に対する態度は、彼の普段のイメージとは異なるものであった。

今回の包裹には「牛肉干など」としか書かれておらず、他の物は書かれていない。この方法は良い。誰も何が送られてきたのか分からない。私はただ日用品が送られてきたと言い、他の人は借りることができない。家族がお金を使ったのに、自分は何も手に入らないということになるのは駄目だよ。(家書1971年2月14日より)

陸融は日常生活や労働で他人を助けることが多い一方で、家族からの仕送りに

関しては特に慎重であり、他人と共有したものはない。この行為は家からの物資への特別な価値を表している。同時に、陸融も雲南の特産品を上海にいる家族に頻繁に送っており、例えば「三七」の使用方法を詳細に説明し、その関連の注意事項を手紙で伝えている。

今回は「三七」を見つけた。質も良く、1両(1両=50グラム)で10元だった。老職員に聞いたところ、年配の方は酒に漬けて飲むことができる。まず「三七」を包丁の背で砕き、酒に漬け、半月ほどで飲める。1斤の酒に4～5個の「三七」を漬け込むのが適量で、多すぎると苦くなる。もう一つの方法は滋養強壮のためのもので、「三七」を油で炒め、粉状にし、処理した小さな雌鶏や若鶏のお腹に詰めて蒸し、塩を加えてよく蒸す。(家書1971年12月16日より)

陸融は、この手紙で「三七」の処理と食用方法を詳しく説明しており、その描写の細かさは生活や仕事の報告を超えている。これも単に雲南の特産品を紹介するためではなく、両親への思いを伝えるためであると考えられる。実際、陸融にとって手紙は彼の思いを伝える主な手段であり、書簡の表現だけでは限界があると感じていた可能性が高い。そのため、陸融は毎月自らの給与を欠かさず家族に送金し、物資も送付することで、言語を超えた感情の伝達を試みたのである。このように、陸融と家族の間で互いにやり取りされた物資と書簡は、彼らの密接な関係を体現しており、下郷においてもその強い絆が重要な役割を果たしたことを示唆している。

おわりに

1972年4月、下郷から約2年が経過した陸融は、初めて「探親假(帰省休暇)」の資格を得た。当時の兵団知青にとって、探親假は非常に貴重であり、それを得るために努力しなければならなかった。この休暇を手に入れるために、陸融は1971年の年末から小隊の指導者に申請を行い、自らの人間関係を上手く活用する方法も学んだ。その様子から、筆者の視点において、陸融は農場に来たばかりの「上海の少年」から「知青」へと成長した姿がうかがえる。現在の彼は、農場に来た当初とは異なり、農業技術や家族への接し方、革命や生命に対する態度など、多くの生活習慣や価値観が大きく変化している。

本論文を通じて、筆者は下郷の初期における陸融の「平凡な生活」と「複雑な感情」を明らかにする試みを行った。従来の知青研究は、集団の一員としての知

青の歴史を概観する傾向が強く、個々人の内面的な変化や日常的な経験は抽象化されがちであった。しかし、本論文では、陸融が両親に宛てた書簡を通じて、彼の個人的な感情や生活を具体的に追うことにより、従来の枠組みを超えた新たな知見を得ることができた。例えば、黄年秀の死は、陸融にとって単なる友人の逝去ではなく、知青としての自身の立場や、命と人間関係の価値に対して深い問いを投げかける出来事であった。彼は政治的使命感や社会の規範に囚われず、「人」として日々の出来事を記述し、家族や友人への深い情感を書簡の至る所で著している。このように、陸融の経験は、従来の下郷の中で埋もれがちな個人の歴史の一端を示している。

本論文が目指したのは、「上山下郷」運動を支えていた「個人」の視点から知青の生活や価値観を描き出すことである。その意味で陸融の個人的な記録は、単なる「上山下郷」運動の一事例として終わるのではなく、運動全体を見直すための重要な一資料といえる。陸融の書簡に表れた日々の記録と感情の軌跡は、彼が知青という枠組みの中で何を見つめ、何に悩み、そして何を大切にしたのかを示しており、今後の「上山下郷」運動研究においても、個人史の視点がどのような意義を持ち得るかを示唆している。

参考文献

- 陳映芳 (2015) 「社会生活正常化: 歴史転換中的『家庭化』」『社会学研究』2015年第5期。
 顧洪章 (2009) 『中国知識青年上山下郷始末 (第2版)』人民日報出版社。
 金光耀 (2015) 「後知青時代の歴史書写」『中共党史研究』第4期。
 劉小萌・定宜庄・史衛民・何嵐編 (1995) 『中国知青事典』四川人民出版社。
 劉小萌 (2009) 『中国知青史: 大潮』当代中国出版社。
 陸融 (2009) 『一個上海知青の223封家書』(沈志明注釈) 上海社会科学院出版社。
 黄巍 (2020) 「20世紀六七十年代小三線職工日常食品供給研究——以遼寧桓仁県三新場を例に運」『史林』第5期。
 潘鳴嘯 (2013) 『失落的一代』(歐陽因訳) 中国大百科全書出版社。
 邱新陸 (2003) 「『知識青年上山下郷』研究総説」『当代中国研究』第4期。
 丘新洋 (2021) 「1970年『革命化春節』研究——以厦門知青為例」『中国共産党史研究』第2号。
 Thomas P. Bernstein (1997), *Up to the Mountains and Down to the Villages—The Transfer of Youth from Urban to Rural China*, New Haven and London: Yale University Press.
 魏瀾 (2021) 「家庭本位的『関係』実践: 私人書信中的家庭主義図像」『社会』第2期。
 楊繼繩 (2016) 『文革期間的国民経済』『二十一世紀』第8期。
 楊新旗 (2013) 『知青上山下郷在雲南』雲南教育出版社。
 張寧 (2021) 「革命、工分与再教育」『二十一世紀』第10期。
 張曙 (2001) 「不對称的社会試驗——論『文革』中的知青上山下郷運動」中共中央党校研究生院博士論文。

注

- 1 「上山下郷」(じょうさんかきょう) 運動、略して「下郷」(かきょう)。「下郷」という言葉は、1942年に中国共産党が延安に革命根拠地を築いた時から使用され始めた(潘鳴嘯

2013:p2)。1955年、中央政府は都市の小・中学校の卒業生に「農村へ行く」、「上山する」、「下郷する」ことを呼びかけ始めた。そして、1968年末から中学校・高校の卒業生を農村へ向かわせる全国的な運動も、「上山下郷運動」と呼ばれるようになった。厳密に言えば、これは参加者が自主的に始めた「社会運動」ではなく、政策の発布とその実行者によって引き起こされた全国的な労働人口の移動に近い。しかし、学界では依然として、これを「上山下郷運動」と呼ぶのが慣例である。本論文における「上山下郷」はこの1968年から1979年にかけての運動を指す。

- 2 以下、「知識青年」を「知青」と略す。劉ほか（1995）によれば、「知青」は1950年代に起源を持ち、最初は中央政府の呼びかけに応じて辺境地区を支援する「支辺青年」を指していた。1966年の「文化大革命」とその後の「上山下郷」運動において、農村や兵団農場へ「下郷」した約1,600万人の中学校・高校の卒業生を指すものとなった。本論文の「知青」はこの特定のグループを指している。
- 3 邱（2003）は知青研究を4つの段階に分けた。その中で、1995年-1999年は中国国内での知青研究の「高潮期」とされ、多くの総合的な知青研究著作や論文が出版された。また、全国規模のシンポジウムや交流会も多数開催され、知青歴史の全体的な構築が大いに促進された。2000年以降、インターネットの普及や海外研究の影響により、知青研究はさらに深まった。国内外の学者は、学際を超える視点から回顧録や口述歴史などを総合的に活用し、知青の生活や「後知青時代」の心理変化をさらに探求した。
- 4 中国の人民公社時代に採用された「工分」制度は、労働者の労働時間に基づいて計算され、単位の生産収益を仕事の分量に応じて労働者に分配する。
- 5 黒五類（こくごるい）は、中華人民共和国において文化大革命初期に、出身論に依拠し、労働者階級の敵として分類された5種類の階層のこと。それに対応する良好な家庭出身は、一般に「紅五類」と総称される。
- 6 2023年8月19日、陸融および沈志明、金光耀、張剛らへのインタビュー。
- 7 2024年8月27日、陸融夫婦および沈志明へのインタビュー。
- 8 同7。
- 9 同7。
- 10 同7。
- 11 昆明市自來水編纂委員会『昆明市自來水志 1915-1990』（雲南民族出版社、1996年）による。
- 12 同6。
- 13 陸融夫婦は「中間知青」として自称した。
- 14 雲南農墾集団有限責任公司編（2003）『綠色潮湧記念雲南農墾創建 50 周年文集（1951-2002）』（非出版物）p15による。
- 15 雲南省農墾総局編纂『雲南省志 卷三十九 農墾志』（雲南人民出版社、1998年）p670 - 691、694 - 695、701、705、712 - 714による。
- 16 「天天読」、文革期間中に毛沢東の著作（語録）を学習するための組織的活動。後に「早請示、晚匯報（朝の確認、夜の報告）」と発展し、時には一日に三食分の儀式を行うことが求められた。
- 17 「砍壩」、斧や刀を使って原生熱帯雨林内のさまざまな樹木や竹を伐採すること。大木や相互に支え合って倒れにくい木が絡み合った複雑な状況では、爆薬による爆破が行われることもあった。（劉平『劫遠農場知青史』内部参考 p79）。
- 18 楊（2013：p78）によると、1969年から1979年にかけて、雲南省では公務中に累計836名の知青が死亡している。
- 19 雲南省委工作組『西双版納農墾システムにおける知青の思想動搖の安定化に関する意見』1978年11月。
- 20 周公正『劫龍記憶：西双版納知青生活記実』（香港文匯出版社、2005年）p289による。
- 21 北京雲南知青聯誼活動委員会『八千子弟—北京知識青年赴雲南十四周年記念文集』2010年（内部印発）p29、49による。

- 22 同上 p115 による。
- 23 編者不明『南腊河歲月——雲南西双版纳水利二团往事回憶』2013年5月（内部印發）p99 による。
- 24 楊新旗『知青上山下郷在雲南』（雲南教育出版社、2013年）p78-79 による。
- 25 同7。
- 26 同7。
- 27 同7。
- 28 1978年には、全国の農民一人当たりの平均所得は76元で、そのうち2億人の農民が50元以下であった。（楊 2016）。
- 29 陸融への電話インタビュー、日時：2024年6月18日。
- 30 「三大差別」、工業と農業の差別、都市と農村の差別、知的労働と肉体労働の差別を指す（潘鳴嘯 2013）。この概念は、スターリン『蘇連社会主義經濟問題』（北京版：pp 25-30）に由来する。
- 31 雲南省農墾総局編纂『雲南省志 卷三十九 農墾志』（雲南人民出版社、1998年）p819 による。
- 32 1970年から1976年までの間、中国での年間一人当たりの豚肉消費量は次の通りであった。1970年11.6斤、1971年13.5斤、1972年13.8斤、1973年14.2斤、1974年14.6斤、1975年14.8斤、1976年14.5斤。（黄巍 2020）。
- 33 「ガラススープ」、ご飯を炊いた米の湯または直接お湯に塩を加えたもので、野菜や肉が一切入っていないため、知青に「ガラススープ」と呼ばれた。

Abstract

The Daily Life of Shanghai Educated Youth in Early Stages of the Yunnan Construction Corps' Farm

Focusing on 'The Letters of Lu Rong' (May 1970 – Early 1972)

You YOU

This thesis investigates the early life of Lu Rong, an educated youth (*zhiqing*) from Shanghai, during his placement in rural Yunnan under the “Up to the Mountains and Down to the Countryside” movement, specifically focusing on the period from May 25, 1970, to early 1972. Through a close examination of Lu’s letters, this study seeks to capture his unique subjective experiences, highlighting how his personal perceptions, responses, and values evolved in response to the demands of rural life. By adopting a micro-historical approach, this research moves beyond collective characterizations, focusing instead on Lu’s day-to-day adaptation to rural challenges such as living conditions, labor, and limited resources, as well as his reflections on ideology and life in a fundamentally different environment. In pursuing these subjective experiences, the study systematically examines the central aspects of Lu’s early years in Yunnan, detailing his adaptation and interactions.

The main body of this thesis explores Lu Rong’s initial years in rural Yunnan, detailing his daily life, labor, and interactions with local villagers, as well as his reflections on ideology and personal values. By examining a range of primary sources, particularly Lu’s letters, the study traces his gradual adaptation to rural life, shifts in worldview, and the development of practical skills and self-reliance. Each chapter addresses key aspects of his experience, from the physical challenges and health risks he encountered to the evolving perceptions of family and social responsibility. Through a close reading of these records, the thesis reveals how Lu’s individual journey offers insights into the personal dimensions of the “Up to the Mountains and Down to the Countryside”

campaign, contributing to a more nuanced understanding of this transformative period in Chinese history. Through these detailed records, the study not only offers insights into Lu’s individual journey but also positions his experience within emerging academic frameworks.

This study contributes to the emerging frameworks of personal history, emotional history, and character history within zhiqing research—areas still developing in terms of methodology. Lu Rong’s adaptation, documented over two years of correspondence, provides valuable insights into how individual values evolved under ideological and environmental pressures, often diverging markedly from the perspectives of urban-bound siblings. His letters present a vivid account of the “Up to the Mountains and Down to the Countryside” campaign’s transformative impact, capturing a deeply personal journey that broadens the scope of zhiqing research by highlighting subjective and experiential dimensions frequently overlooked in favor of broader narratives. By situating Lu’s experiences within these developing frameworks, this thesis advances a nuanced perspective on the campaign, underscoring the critical role of individual agency and emotional continuity amid state-driven social engineering.

Keywords: Zhiqing, personal history, emotional history, character history, family bonds, Up to the Mountains and Down to the Countryside movement, ideological adaptation.

